

き、これらの類も又かぞふるにいとまあらず、凡和漢古今の事を併考するに、天下の治亂、人壽の長短、年號の字にかゝはらざること如此、

〔鹽尻四〕一謝肇淵曰、自古以正爲號多不利也。如梁正平天正、元至正之類爲其文一而止也と云々、按するに、是拘れる説か、夫正は君也、長也、定也、平也、是也、又邪の反にしてたゞしきを云、何の止りと云事がある、一而止、拆字の附會也、正の古文が正なる、是をも一而止といふべきやと云ひしに、或人曰、吾子が言も又一偏の義か、つらく思ふに、我國文武帝の大寶已來、年號正の字を命ぜしは、一條院正暦を始とす、彼帝花山の淫風を繼ぎ、惰弱上古にもためしなかりし故、執柄家恣に天下を左右せし、是よりぞ王家の威衰へ、權下に移りし、其後は土御門院正治、其元年に賴朝薨じ、同御宇に賴家横死し、帝も又讓位の後西狩し給へり、後深草院正嘉二年暴風洪水、流疫打續き、伏見院正應元年大地震、其三年淺原八郎南殿を犯して自害せし、花園院正和四年鎌倉大火の災、後醍醐帝正中元年地妖數々ありて、帝外國へ遷らせましませし、光嚴院正慶空しく廢帝の號となれり、後村上院正平立かへる皇運もましまさず、南山に終らせ給ふ、稱光院正長は、凶に依り一年にして停ぬ、後花園院康正寛正の如き、天變兩日及三日現事毎度、疫癆巷に満て、中々あさましき世也、後柏原院永正元年天下飢饉、前代未聞の凶事なりき、その他三笠山の神木、故なくして數株枯れ、彗星顯れて、太神宮池魚災ありし、山崩れ、海溢れ、永正七年八月廿日洪濤、遠州今切入海となる或は武臣細川政元害せられ將軍家東に奔り給ひし、正親町院天正に、京師寇火災玄げく、其十三年信長弑せられ給ふ、又大風、洪水、地震、疫病、よからぬ事多かりし、此等の凶事、それならぬ年號の時も毎々に有りしかども、謝氏が言によつて史を見れば、さる事多し、近頃後光明院正保、さしも凶變なかりしかど、明主援兵を請ひ、世間さわがしく、且在位の内崩御の御事、近き世聞へ給はず、○中今之正徳改元の後、壽經院○院經院女院、崩御、京極の宮打續薨せませみます、大樹の御幼君虎吉も過し冬御早世ありしことし